

## 入選

### 「” It” (それ)と呼ばれた子」

デイヴ・ペルザー (ヴィレッジブックス)

フードビジネス学科 鍋島千帆希

「なぜ、ぼくだけがこんな目に？」—母親に名前さえ呼んでももらえない。” That Boy(あの子)” から、ついには” It(それ)” と呼ばれるようになった主人公” デイヴ・ペルザー”。食べ物も与えられず、奴隷のように働かされる日々。身の回りの世話はおろか、暴力をふるわれ、命の危険にさらされ、かばってくれた父親も姿を消してしまう。

この物語の中では、体罰以上に残酷な、「心理的虐待」の恐ろしさが、綿密に描かれている。家庭の密室の中で、「ぼく」は、性的虐待以外のあらゆる虐待を徹底的に仕掛けられ、長い苦難が続く。” 誰かにいえばエスカレートする” という負の連鎖がうずまく中、「ぼく」はどのようにしてこの生活から我が身を守っていくのだろうか。

児童虐待の体験者がその記憶をたどることは、きわめて苦痛と困難をともなうものだろう。この本は、米国カリフォルニア史上最悪といわれた虐待を生き抜いた著者が、幼児期のトラウマを乗り越えて自ら綴った、貴重な真実の記録である。

私にとって” 虐待者” の道に進んでしまったデイヴの母親は、「病气」としか思えない。虐待の方法も子供にまともな衣食住を与えないだけでなく、汚物を食べさせたり、毒ガスを吸わせたりと、私の日常からの想像を絶するものだった。これらの異常行動を「病气」と言わずして、どうやって理解をすることができようか。「ぼく」の幼年期を目の当たりにして、驚愕し、なにも言葉がでなかった。

この本は、「幼年期」「少年期」そして「青年期」(完結編)へと続き、デイヴのこれから先の人生が綴られていく。つらい幼年期を過ごした「ぼく」がどのような大人になり、そしてどのような人生を歩んでいくのか。

今、愛情とはなにか、どんなものなのか、わからなくなっている人、自分を見つめ直し立ち直りたい人におすすめしたい本である。